

「静かな誕生日」

—初稿—

2025/08/02

しのめ ののの

〈人物表〉

木村 夏輝

(17)

男子高校生。3年

1. 高校・廊下（朝）

制服姿の木村夏輝（17）、通学鞆を手に廊下を歩いている。地味な外見。時折欠伸をしている。窓の外に見える木には蝉がとまっている。うだるような夏の晴天である。

2. 3年2組の教室（朝）

夏輝が寝ぼけ眼で教室の扉を開けると、クラスメイト達が盛り上がっている。騒ぎで眠気が飛ぶ。黒板に大きく「7/31 りょーすけ 誕生日おめでとう！」と書かれている。その周りにはふぎけた絵やコメント、華やかな装飾などが添えられている。教室の中ほどで男子生徒が照れている。周囲に生徒たちが集まって一緒に写真を撮ったり、プレゼントを渡したりしている。夏輝は茫然としていたが、ふと得心した表情に変わる。盛り上がるクラスメイト達を硬い表情で眺めつつ、自席に座る。賑やかな黒板を見つめる。

3. 3年2組の教室（朝）

生徒たちがまばらに着席し、授業を受けている。彼らの机には、夏期講習のプリントや教材など。黒板前で教師が何やら熱心に話している。黒板には、消された誕生日祝いの痕跡が薄らと見えている。

夏輝、そわそわした様子でそれを見つめている。

4. 安アパート・外観（夕）

片田舎の古いアパート。

5. 木村家・ダイニングキッチン（夕）

2DKの狭い一室に、通学鞆を持った夏輝が帰宅する。

鞆を適当に下ろし、そのまま洋室の扉の前へ。

扉をそつと開けて中を覗く。

派手な衣類が散乱するベッドの上に、着の身着のままの母親が爆睡している。時折りびきをかいている。夏輝、諦めたように扉を閉じる。音を立てず、ゆっくりと。

6. 木村家・ダイニングキッチン（深夜）

ダイニングキッチンの明かりだけが点いたりびんぐ。夏輝、ダイニングテーブルの椅子に座ってぼんやりとしている。

テーブルには公共料金の督促状やチラシが散乱している。夏輝の前にはスマホが置かれている。

壁に掛かった時計が0時を指す。

夏輝、それを見てスマホに視線を落とす。スマホは静か。母親の部屋からはいびきが聞こえてくる。

夏輝、詰めていた息を吐き出す。

その場を動けず俯く。

7. 木村家・ダイニングキッチン（朝）

母親の洋室と隣接する和室から、通学鞆を持った夏輝が出てくる。

母親の部屋の扉は開け放たれ、誰も居ない。

夏輝、虚ろな目でそれを一瞥し、何も食わずにそのまま家を出る。

8. 3年2組の教室（朝）

通学鞆を持つ夏輝、緊張した面持ちで教室の前に立っている。恐る恐る扉に手を伸ばし、思い切って開ける。

教室は閑散としている。数人の生徒がまばらにたむろし、雑談している。誰も夏輝に目を向けない。黒板には何も書かれていない。

夏輝、思わずショックを受けたような表情。すぐにそれを隠し、自席へ鞆を置く。

徐に壁のカレンダーを見に行く。7月のカレンダーのまま。31日の欄に「りょーすけ」という文字と、ケーキのマークが書かれている。

夏輝、7月のカレンダーを破る。8月1日の欄には何も書かれていない。手元のカレンダーをぐしゃ、と握る。

9. 木村家・ダイニングキッチン（夕）

通学鞆を持った夏輝が帰宅し、鞆を適当に下ろす。ダイニングテーブルの隅に、メモ書きと千円札。冷蔵庫を開ける。ほぼ何も入っていない。ため息を吐いてテーブルに戻り、千円札を手に取る。ふと、散乱したチラシに目が留まる。上の方に、花火大会のチラシが置かれている。

10. 近所の田舎道（夕）

夏輝、花火会場付近の田舎道を一人で歩いている。Tシャツに短パンというラフな格好。人々が追い越していたり、すれ違ったりする。みな家族や友達、彼氏彼女と共に歩いている。いずれも楽しい様子。浴衣を着ている人もいる。

夏輝、不意に足を止める。おもしろくない顔をしているのは夏輝だけである。

夏輝の足が踵を返し、来た道に戻ろうとする。ふと何かにぶつかる。小さな男児である。

男児は泣きべそをかいている。膝を擦りむき、血が滲んでいる。

夏輝、困った表情。

11. 小学校・校庭（夜）

仮設テント屋台や人々で賑わう華やかな校庭。田舎らしい、小規模の花火大会といった雰囲気。

12. 小学校・校庭隅の水道前（夜）

夏輝が男児の膝を洗っている。

男児は痛みで半泣き。

洗い終わり、手を繋いで歩き出そうとするが、男児が動きたがらない。

夏輝、困った表情。少し考えてから、仕方なく男児をおんぶしようとしやがみ込む。男児は素直に従う。

13. 小学校・校庭の屋台列付近（夜）

男児を背負った夏輝、屋台列の端のテントへ向かっている。すっかり汗をかいている。

テントの下ではスタッフ、30代前半の男女、子連れの女性が話し込んでいる。一同が夏輝と子どもに気づく。男女と子連れの女性、あつという表情を浮かべ、近づいてくる。

夏輝が男児を降ろすと、泣きながら男女に抱きつく。男女は男児を強く抱きしめたり、撫でたりする。

女性の連れている女兒が話しかけ、男児が恥ずかしそうに涙を拭う。

夏輝、その様子を無表情で眺めている。

両親が顔を上げ、警戒した表情で夏輝に会釈する。

夏輝、ぎこちない笑顔で会釈を返し、男児に手を振る。男児は振り返らずにじっと見ている。夏輝、その場を離れる。

ふと視線の先に、数人のクラスメイト達がいることに気づく。その中には「りょーすけ」もいる。みな楽しい様子。女性陣は浴衣を着ている。

夏輝、隠れるように慌ててその場を去る。

14. 近所の田舎道（夜）

楽しい人々が花火会場に向かう中、夏輝だけが逆方向に歩いている。伏し目がち。

ふいに夏輝の足が止まる。目を見開き、振り返る。遠方の空に花火が上がっている。非常に美しい。

周囲の人々が声を上げ、笑顔で見上げたり、足を早めたりしている。

黒い夜空に、花火が次々と上がる。黒板の装飾よりも遥かに美しく、何かを祝うように。

夏輝、その場に立ち尽くしている。空を見上げたまま、動けなくなっている。

夏輝の頬に、涙が一筋流れる。

おわり